

## ◆資料

母子保健医療に携わる看護職を対象とした  
周産期メンタルヘルス勉強会の実践報告

Report of the Study Group on Perinatal Mental Health for Nurses

大谷 利恵 玉木 敦子 植田 奈津実 高橋 秋絵

Rie Otani, Atsuko Tamaki, Natsumi Ueda, Akie Takahashi

地域母子保健における精神保健看護活動の一環として、平成25年から母子保健医療に携わる看護職を対象に開催している第1回～第15回周産期メンタルヘルス勉強会について、参加者へのアンケート結果から勉強会の実際について報告する。参加者の勉強会の満足度は、「とても満足した」「まあまあ満足した」が延べ205名(98.6%)、有用度は、「とても役立つ」「まあまあ役立つ」が延べ208名(100%)といずれも高かった。満足度・有用度の選択理由に関する自由記載には、色々な職種・立場の意見を聴くことができた、他職種・他機関について理解が深まった、地域の交流の場・連携を学ぶ場となった、事例検討により具体的な関わりを学ぶことができた、精神保健看護の専門的知識や対応を学ぶことができた、地域母子保健の取り組みを知ることができた、実践の参考にできる、実践の振り返りに役立つ、などの意見が複数あった。参加者は勉強会で周産期メンタルヘルスの知識を高め、それぞれの実践に役立てるだけでなく、多職種多機関の相互理解を深めて地域交流や連携について学ぶことができていた。

キーワード：周産期メンタルヘルス、看護職、勉強会

Key words：Perinatal Mental Health, Nurses, Study Group

## I. はじめに

筆者らは、地域母子保健における精神保健看護活動の一環として、平成25年から母子保健医療に携わる看護職を対象に、周産期メンタルヘルス勉強会(以下、勉強会)を開催している。勉強会の主な目的は、①周産期メンタルヘルスに関する理解を深める、②事例検討を通して精神状態のアセスメントや関わりの実践について理解を深める、③他機関の役割・機能について理解を深め、連携を促進することである。

本稿では、勉強会終了後に実施しているアンケートの結果から、地域母子保健における精神保健看護活動としての勉強会の実際について報告する。

## II. 周産期メンタルヘルス勉強会の概要

勉強会は3～4ヶ月に一度程度、土曜日または日曜日の午後3時間、筆者らが所属する大学内で実施した。参加者は複数回参加しているものが多く、各回の事例・話題提供者やそのテーマは、参加者の希望に沿って決定し

た。当日は事例・話題提供者の情報を共有した後に参加者同士で意見交換するという流れで実施しており、運営と当日の進行を筆者らが担当している。

第1回から第15回までの勉強会の実施状況について、テーマ、事例または話題提供者(職種)、参加人数、アンケート回収数などを表1に示した。

## III. アンケート結果

全15回のうち計13回の勉強会終了後に、無記名アンケートを実施した(第13回は自由記載のみ実施)。ここでは、回収された延べ231名のアンケート結果について報告する。

## 1. 職種

各回の職種別参加者数を図1に示した。職種別の延べ人数は、助産師114名、保健師57名、看護師27名、その他9名、その他は大学教員、ソーシャルワーカー、事務職であった。

## 2. 周産期メンタルヘルスに関する学習経験と方法

「これまでに周産期メンタルヘルスに関する勉強をされたことはありますか」という設問に、「ある」と回答したのは延べ172名、「ない」と回答したのは延べ35名

表 1 周産期メンタルヘルス勉強会の実施状況

	日 時	テ ー マ	事例・話題 提供者	参加者数 (アンケート回収数)	備 考
第 1 回	平成 25 年 3 月	妊娠後期に産科を初診し、出産後に夫からの DV が確認された事例への関わり	市保健師	14 名 (12)	
第 2 回	平成 25 年 6 月	境界型パーソナリティ障害をもつ女性への妊娠期からのサポート	精神看護 CNS	13 名 (0)	アンケート実施せず
第 3 回	平成 25 年 9 月	産後 3 週目に不眠、食欲低下を主訴に再入院した経産婦への関わり	産科助産師	不明 (0)	アンケート実施せず
第 4 回	平成 25 年 12 月	発達障害が疑われていた未婚女性への出産・育児を支える看護	産科助産師	18 名 (15)	
第 5 回	平成 26 年 3 月	うつ病の既往があり、妊娠中に強迫神経症と診断された褥婦への対応	産科助産師	19 名 (17)	
第 6 回	平成 26 年 6 月	虐待予防に向けた親子支援	市保健師	18 名 (15)	
第 7 回	平成 26 年 9 月	0 歳児期の親子の絆づくり：区での取り組み	市保健師	不明 (22)	
第 8 回	平成 26 年 12 月	妊娠中に児の障害を診断された妊婦への関わり	産科助産師	22 名 (19)	
第 9 回	平成 27 年 3 月	生殖医療や出生前診断を受ける女性へのメンタルヘルスについて	産科医 助産師	29 名 (23)	
第 10 回	平成 27 年 10 月	出生前に予後不良と診断された胎児の母親への心理的支援について	精神看護 CNS 保健師	19 名 (17)	
第 11 回	平成 28 年 2 月	精神科病棟に入院中の妊産婦へのケア	精神看護 CNS	25 名 (17)	
第 12 回	平成 28 年 6 月	産科病棟入院中の不安が強い妊婦への関わり	産科助産師	21 名 (18)	
第 13 回	平成 28 年 9 月	てんかんの既往を持ち、不安の強い妊婦の産後の支援について	産科助産師	31 名 (22)	アンケート自由 記載のみ
第 14 回	平成 29 年 2 月	産科病棟入院中のせん妄疑いの母親への関わり	母性看護 CNS	16 名 (12)	
第 15 回	平成 29 年 6 月	子育て世代包括支援センターにおける活動報告：妊娠期からの早期支援を中心に	市保健師	24 名 (22)	

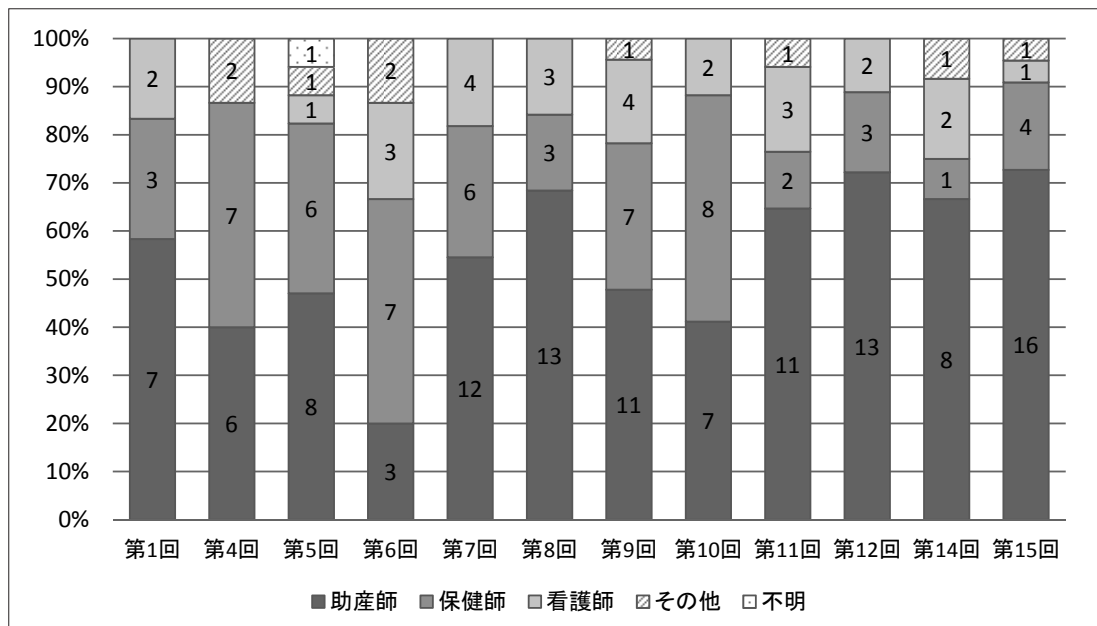


図1 職種別参加者数

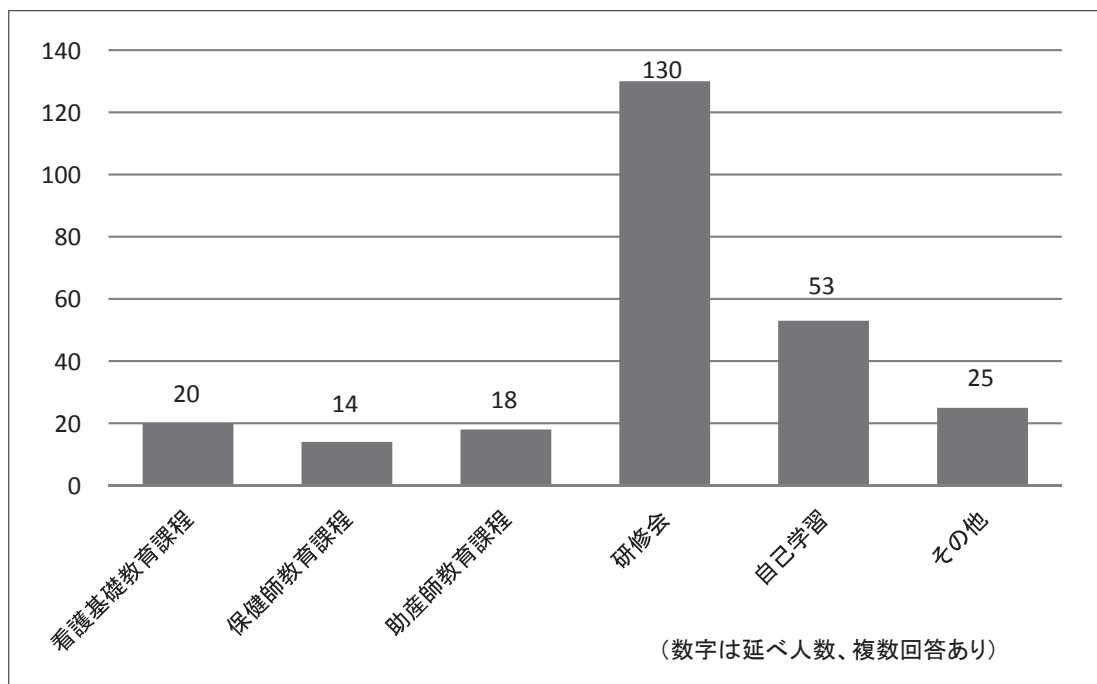


図2 周産期メンタルヘルスの学習方法

であった。「ある」と回答した者の学習方法（看護基礎教育課程，保健師教育課程，助産師教育課程，研修会，自己学習，その他，の6択，複数選択可）は、「看護師基礎教育課程」20名，「保健師教育課程」14名，「助産師教育課程」18名，「研修会」130名，「自己学習」53名，「その他」25名（いずれも延べ人数）であった（図2）。

### 3. 勉強会の満足度

「今回の勉強会について該当するものを選んでください」という設問（とても満足した，まあまあ満足した，やや物足りなかった，物足りなかった，の4択）の各回の結果を図3に示した。「とても満足した」の延べ人数は189名，「まあまあ満足した」の延べ人数は16名，「や

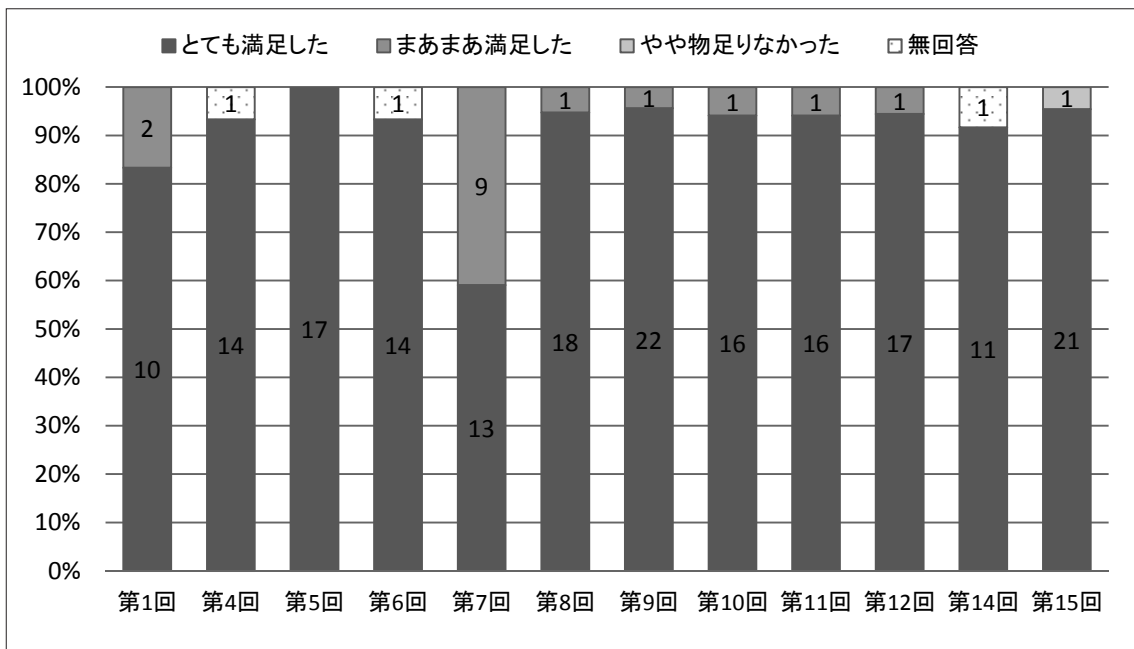


図3 勉強会の満足度

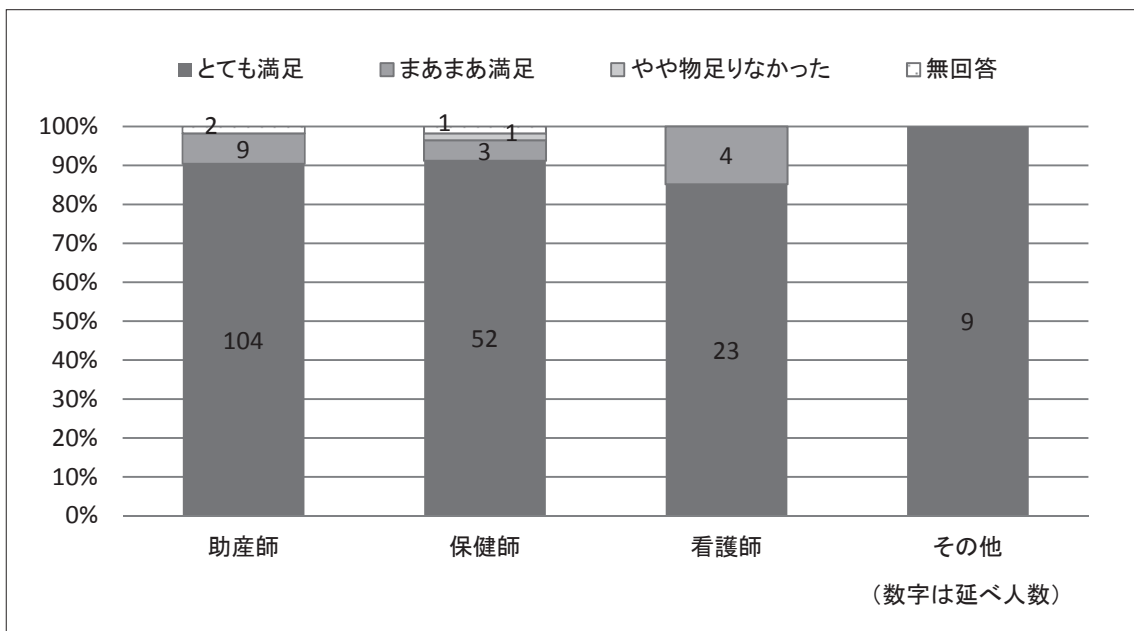


図4 勉強会の満足度 (職業別)

「やや物足りなかった」の延べ人数は1名、「物足りなかった」は0名であった。職種別の延べ人数は、図4に示した。

#### 4. 勉強会の有用度

「今回の勉強会はあなたに役立ちますか。該当するものを選んでください」という設問（とても役立つ、まあ

まあ役立つ、あまり役立たない、役立たない、の4択)の各回の結果を図5に示した。「とても役立つ」の延べ人数は177名、「まあまあ役立つ」の延べ人数は31名、「あまり役立たない」、「役立たない」は0名であった。職種別の延べ人数は、図6に示した。

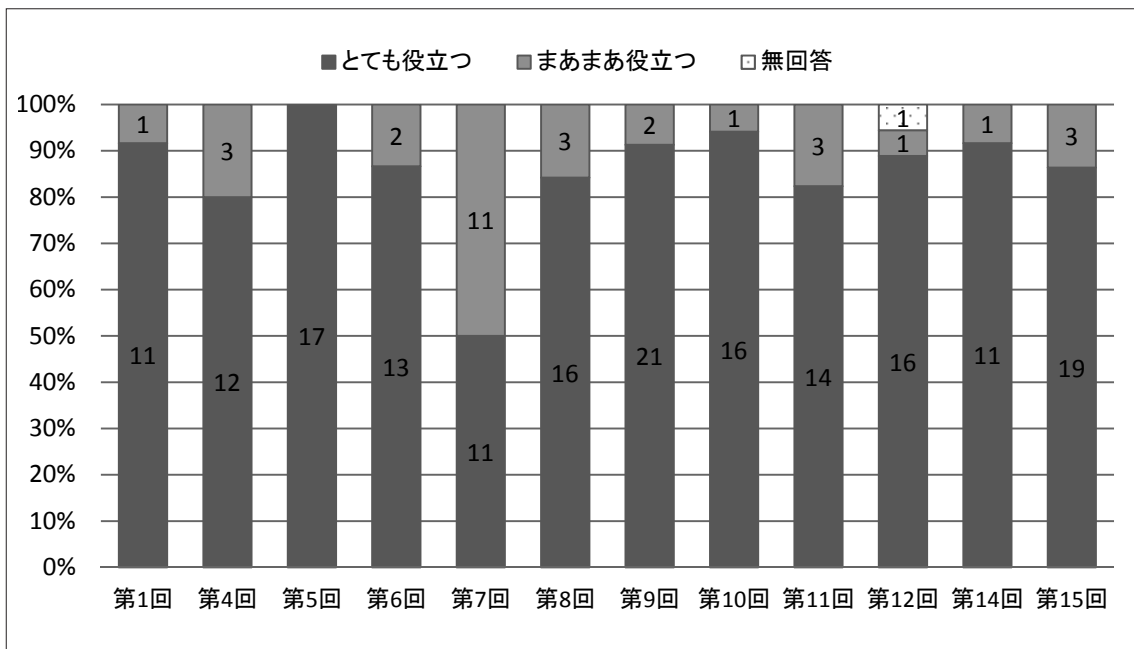


図5 勉強会の有用度

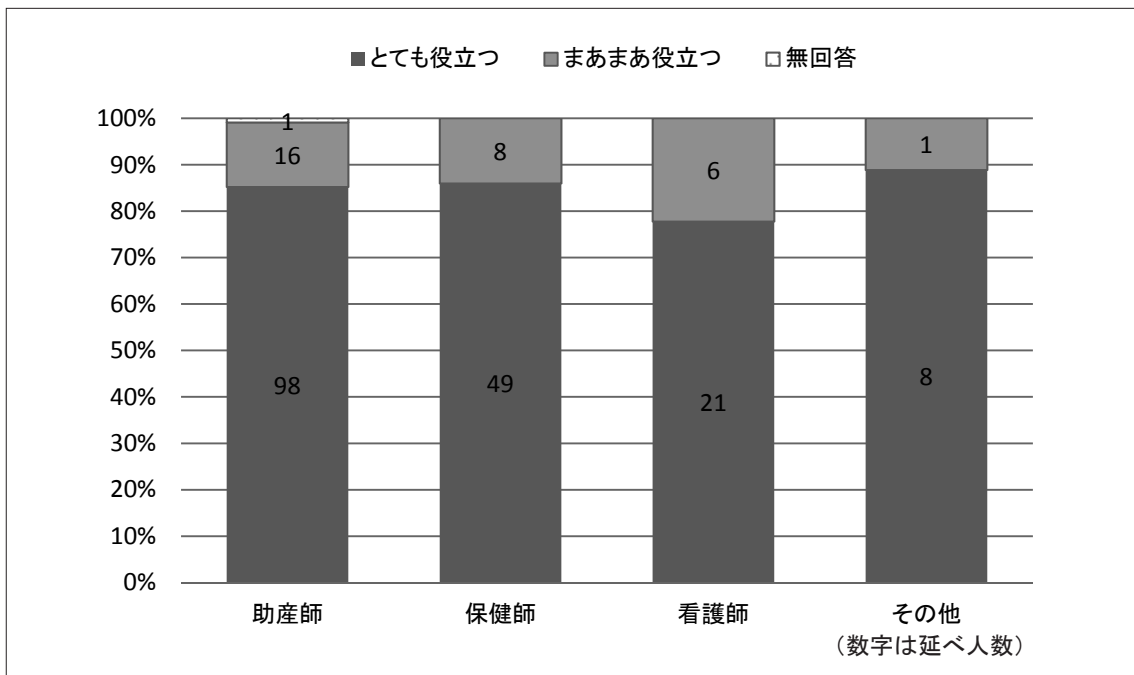


図6 勉強会の有用度（職業別）

### 5. 満足度、有用度の選択理由（自由記載）

満足度、有用度の選択理由について自由に記載する欄を設けた。満足度、有用度の理由として複数あげられていたのは、「普段、関わることのない職種の方々の意見を聞けた」や「事例をもとに、様々な立場から関わりの

方向性を深めることができ勉強になりました」などのように、事例や話題の検討を通して、「色々な職種・立場の意見を聴くことができた」という意見だった。また、保健師は「医療機関サイドの行政への要望や連携の必要性の確認ができました」、助産師は「地域で行っている

支援, 活動内容を知ることができて良かった」というように, 《他職種・他機関について理解が深まった》と考えられていた. そして勉強会そのものが《地域の交流の場, 連携を学ぶ場となった》という意見もあった. 勉強会で事例検討を行うことによって, 「事例を通してグループで話し合ったり, 全体で意見交換することで, 具体的な方法や関わり方が見えてきて, 勉強になりました」というように, 《事例検討により具体的な関わりを学ぶことができた》と感じたり, 「精神疾患の症状, 振り返り方, 対応の仕方を専門の先生から聞いて良かった」というように, 《精神保健看護の専門的知識や対応方法を学ぶことができた》, あるいは「行政での様々な取組みを知ることができて良かった」というように, 《地域母子保健の取組みを学ぶことができた》などの意見も見られた. これらの学びは, 「自分が担当しているケースの

参考になりました」というように, 《実践の参考にできる》ものであると感じられ, また「今回のような事例も多いので自分の関わり方も含めて振り返りにもなりました」というように, 日頃の《実践の振り返りに役立つ》とも考えられていた. 自由記載の中には, 「グループメンバーが多く, 意見交換が難しかった」, 「もう少し時間をとってゆっくり話し合いができれば良かった」, 「ケアの内容についてももう少し詳しく学びたかった」など, 進行方法に関する意見も見られた(「」内は実際の記載, 《》は主な記載の内容).

#### 6. 今後の勉強会に希望する内容

今後の勉強会に希望する内容としては, 産後うつ, 発達障害, パーソナリティ障害その他の精神疾患合併または疑いのある妊産婦への支援について(14件), 不妊治療後, 若年, 高齢, 特定妊婦などの心理社会的ハイリス

表2 満足度・有用度の選択理由(自由記載)

内 容	代表的な自由記載(実際の記載)
色々な職種・立場の意見を聴くことができた	普段, 関わることのない職種の方々の意見を聞いた
	事例をもとに, 様々な立場から関わりの方の方向性を深めることができ勉強になりました
他職種・他機関について理解が深まった	医療機関サイドの行政への要望や連携の必要性の確認ができました
	地域で行っている支援, 活動内容を知ることができて良かった
	普段自分が悩んでいたことが, 共通の悩みだったことが分かり安心しました
地域の交流の場, 連携を学ぶ場となった	地域の人と交流する機会になった
	地域連携に向けた学びを得ることができた
事例検討により具体的な関わりを学ぶことができた	事例を通してグループで話し合ったり, 全体で意見交換することで, 具体的な方法や関わり方が見えてきて, 勉強になりました
精神保健看護の専門的知識や対応を学ぶことができた	精神疾患の症状, 振り返り方, 対応の仕方を専門の先生から聞いて良かった
	発達障害について特徴的な部分と具体的な関わり方について, 事例を通して学ぶことができた
地域母子保健の取組みを知ることができた	BPプログラム(親子の絆づくりプログラム)を初めて知ったが, 行政での様々な取組みを知ることができて良かった
実践の参考にできる	自分が担当しているケースの参考になりました
実践の振り返りに役立つ	今回のような事例も多いので自分の関わり方も含めて振り返りにもなりました

ク妊産婦への支援について（10件）、医療・保健・福祉あるいは産科と精神科というような多職種多機関における連携を学べる内容について、またはカウンセリング技術のような面接技法、などの意見があった（表3）。

#### IV. 考察

勉強会参加者の職種別延べ人数は、助産師が最も多かったが、各回はいずれも、保健師、助産師、看護師、看護教員など様々な職種の看護職者によって構成されていた。参加者のうち周産期メンタルヘルスの学習経験がある者は、回答者延べ人数208名中172名（82.7%）と多く、ほとんどが研修会参加や自己学習による学習を行っていた。しかし学習経験のない参加者も延べ35名（16.8%）存在しており、参加者は職種も学習経験も多様であった。

勉強会の内容については、自由記載のみの回答者を除く延べ人数208名中の205名（98.6%）が「とても満足した」あるいは「まあまあ満足した」、同様に自由記載のみの回答者を除く延べ人数208名全員が「とても役立つ」あるいは「まあまあ役立つ」と答えていたことから、参加者のほぼ全員が高い満足度と有用度を感じていることが明らかになった。「とても満足した」と「まあまあ満足した」、あるいは「とても役立つ」と「まあまあ役立つ」の回答者数の差については、各回によって多少のばらつきは見られるものの、職種による違いはほとんどなく、母子保健医療に携わる多職種の看護職者が同様に満足感や有用性を感じられていた。満足度や有用度の選

択理由として自由記載に書かれていた《事例検討により具体的な関わりを学ぶことができた》、《精神保健看護の専門的知識や対応を学ぶことができた》、《実践の参考にできる》などは、事例検討を通して精神状態のアセスメントや関わりの実際について理解を深めるという勉強会の目的と、《色々な職種・立場の意見を聴くことができた》、《他職種・他機関について理解が深まった》、《地域の交流の場、連携を学ぶ場となった》などは、他機関の役割・機能について理解を深め、連携を促進すること、という目的とはほぼ一致していた。これらのことから、勉強会は目的に沿った実践ができていることが確認できた。自由記載の中の「グループメンバーが多く、意見交換が難しかった」、「もう少し時間をとってゆっくり話し合いができたら良かった」という意見については、現在は参加者数の増加に伴い、小グループによる意見交換を取り入れて実施している。

今後の勉強会に希望する内容として意見が多かった精神疾患合併妊産婦や心理社会的ハイリスク妊産婦については、妊産婦自殺事例との関連が高いこと（竹田, 2017）や、児童虐待のリスクが高いこと（社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会, 2016）が報告されており、周産期メンタルヘルスにおける重要な課題である。このような妊産婦の支援は、これまでの勉強会のテーマとしても何度も取り上げられてきたが、今後も繰り返し学んでいくことが参加者に望まれているということが明らかになった。

表3 今後の勉強会に希望する内容

延べ36名、（ ）は件数

希 望	具体的内容
精神疾患合併または疑いのある妊産婦への支援（14件）	精神疾患合併あるいは精神疾患疑いの妊産婦、産後うつ、発達障害、パーソナリティ障害などの妊産婦への支援 など
心理社会的ハイリスク妊産婦への支援（10件）	不妊治療後、若年、高齢、特定妊婦、社会資源とつながりにくい、家庭環境や家族関係が困難な妊産婦への支援 など
多職種多機関における連携（6件）	医療・保健・福祉の連携、産科と精神科の連携、妊娠期における連携、地域の産後支援や訪問支援 など
面接技法（2件）	カウンセリング技術、面談の方法
その他	妊娠中のメンタルヘルス、胎児診断による母親や家族のメンタルヘルス、産後早期のケア、対応困難事例 など



## V. まとめ

妊産婦のメンタルヘルスの重要性が高まる中、地域母子保健には産科医療機関と連携しながら妊娠期から切れ目ない支援を提供することが求められている。しかし、周産期メンタルヘルスの実践の場は、行政の中でも母子保健と精神保健、医療においても産科、小児科、精神科などと多様な機関に分かれてしまうことから、連携には困難が多いとも言われている（渡邊ら，2017）。このような中、筆者らが実施している勉強会において、多様な看護職が実践報告や意見交換を通じて周産期メンタルヘルスの理解を高め、それぞれの場における実践に役立てるだけでなく、多職種多機関の相互理解を深め、地域交流や連携を学ぶことができていることは大変有意義なことであると考え、地域母子保健における精神保健看護の一つの重要な役割として、今後更に研鑽を続けながら、勉強会を継続していきたい。

## 謝辞

アンケートに御協力いただきました看護職の皆様には感謝申し上げます。なお、周産期メンタルヘルス勉強会は、科学研究費（平成 27～30 年度、基盤研究（C）：課題番号 15K11832）の補助を受けて行った。

今回の論文に関連して、開示すべき利益相反状態は無い。

## 文献

- 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会（2016）. 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第 12 次報告）. <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000137018.pdf>（閲覧日：2017 年 10 月 31 日）
- 竹田省（2017）. 妊産婦死亡原因としての自殺とその予防－産後うつを含めて. 臨床婦人科産科, 71 (6), 506-510
- 渡邊博幸, 榎原雅代（2017）. 精神保健と母子保健の連携はなぜ困難なのか？ 3つの連携障壁とその解決. 精神科治療学, 32 (6), 719-722